様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月 １４ 日現在

機関番号：３３９４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１１８９７

研究課題名（和文）LGBTAの人々の互助関係の研究――超高齢社会のコミュニティ形成の一モデルとして

研究課題名（英文）A study of the relationship for mutual aid among LGBTA People-as a model for community formation in an aging society with an ultra-low birthrate-

研究代表者
稲垣　惠一（INAGAKI, Keiichi）

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・非常勤研究員

研究者番号：７０８１１６９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、将来の超少子高齢社会ではひとり世帯の高齢者が血縁や婚姻関係のない身近な他者との互助が必要になるという見通しのもと、現在のLGBTXの人々をインタビューし、また、異性愛者のカップルにおける性交痛カウンセリングを分析した。それらを老成学の視点から考察することで、LGBTAの人々がそれ以外の人々とセクシュアリティを基軸としない互助関係をバー等を通じて形成しているということを明らかにした。それに加えて、日本の同性パートナーシップ制度や社会運動の不十分な点を洗い出し、バーのような人々の集まる場所を拠点とすることを互助の一モデルとして示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　これまでのLGBTXをめぐるセクシュアリティ研究では、LGBTXの人々への差別の解消が研究や社会運動の基軸にあり、その重心は法的問題に置かれていた。そのせいで、LGBTX研究の最終目的が性の多様性の共生社会であるにもかかわらず、個々のLGBTXの人々の関係が不可視化され、多様な性の異性愛モデルへの回収がその目的であるようにも見えた。この点に光を当て、将来の超少子高齢社会を展望し、異性愛者を含めた性の多様性の共生の萌芽をLGBTAの人々のうちに見た点に本研究の学術的意義がある。また、ひとり世帯の高齢者の互助モデルのひとつを示し、その問題点と限界を示した点にも社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：　In this study, we interviewed the current LGBTX people with the prospect that the elderly in a single household will need mutual assistance with other people close to them who are not related to blood or marriage in the future ultra-low birthrate and aging society. We analyzed sexual intercourse pain counseling in heterosexual couples.By considering them from the perspective of Re-Ageing Gerontology, it was clarified that LGBTA people form mutual aid relationships with other people through bars and the like, which are not based on sexuality.In addition, we identified the inadequacies of Japan's same-sex partnership system and social movements, and showed that the mutual aid should be based in a place where people gather such as a bar, as a model of it.

研究分野：哲学　倫理学　生命倫理学　ジェンダー論

キーワード：LGBTX　少子高齢社会　老成学　生殖補助技術　カウンセリング　同性パートナーシップ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

稲垣惠一

1. 研究開始当時の背景

同性愛者差別の研究や社会運動は、これらの人々の社会的解放目的とし、異性愛を社会から脱中心化するという戦略的手段を通して、セクシュアリティを最大限に差異化し、LGBTX(A を含む)の人々と異性愛者との平等や性の自己決定といった権利獲得、ひいては、ひいては「多様性の共生」の実現を目的としてきた。しかし、平等や自己決定という権利要求は、異性愛者の権利と同じものを LGBTX の人々にも拡張するという要求であるから、異性愛中心の単一の平等要求へ回収され、セクシュアリティを持つ人々の間で対立を生じさせており、「共生のビジョン」も不明瞭である。これに対して、自らとは異なったセクシュアリティを持つ人々とセクシュアリティを承認し支え合うという仕方で、抽象的な平等や自己決定を生活の場で実現している LGBTA の人々も出現している。これは、権利獲得が目指す方向とは明らかに異なった「多様性の共生」という動向である。ところで、わが国は、少子化と高齢者の長寿化により、「超高齢化」の時代が到来すると言われており、高齢者支援は少数の構成員からなる家族によるものとなるということが予想されているが、少数の構成員からなる家族や身近な他者による高齢者支援や互助は、これまでの LGBTX の人たちの生活が先取りしていると考えられる。こうした方向の研究はこれまでほとんど見られなかった。これが本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、「老い(aging)」に着目し、平等や性の自己決定への社会的な権利要求から視座を転換し、LGBTX 研究が本来目指してきた「多様性への共生」へと目的を正しく設定し直し、しかもそれを「身近な多様な他者との支え合い」として掘り下げる。このことは、LGBTX の人々とその他の多様な人々とのかかわり合いを、多様な互助関係のひとつとして捉えることを意味する。この見方は、セクシュアリティを超えて超高齢社会全体へと展望し、互助的コミュニティがいかにして形成されていくのかという問いへの視座ともなる。ここに生まれる学術的問いは、超高齢化社会の多様な人々どうしの共助的モデルはどのようなものか、である。

3. 研究の方法

本研究の方法は 3 つからなる。一つめは、LGBT の生活形態と互助の実態調査である。これの研究対象は、大都市圏(札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡、那覇)の LGBTX の人々と、個人である。これらをインタビュー調査することで、現在の LGBTX の互助関係や共生の実態を鳥瞰的に明らかにした。その方法は、半構造化インタビューを用いた質的記述的研究である。二つめは、同性パートナーシップ制度の法学的研究である。近年、様々な市町村で同性パートナーシップ制度が導入されているが、海外の同様の制度とそれを比較してみると、わが国の制度の不十分さがみられる。そこで、本研究では、とりわけてフランスの PACS 法とわが国の制度を法学的な視点から比較し、その問題点、改善点を指摘して

いる。その射程は養子縁組制度や里子制度にも及んでいる。三つめは、性交痛患者における家族問題の精神分析的考察である。一見すると、この問題は異性愛者の婚姻家族が抱える問題に見えるが、この問題は現代が異性愛家族中心社会であるということを明らかにしてくれる。異性愛婚姻家族の中のマイノリティの問題は、LGBTX が抱え込んでいる挙児や生殖補助技術をめぐる家族問題やまた異性愛者の非婚姻希望者の抱える孤独の問題とも重なり合うので、婚姻によらない多様な家族像や身近な他者像を展望することになる。

これら三つの成果を老成学(Re-ageing Gentology)的に分析した。老成学が目指すことは、地域に暮らす老人世代が、同世代や他世代と関与する中で、コミュニティの活性化を共に担うことを通じて、地域コミュニティの中に持続可能な社会を実現することだが、この学の理念にもとづき、先の三つの研究成果を人々の四つの活動領域(共同、実用、統治、理想領域)を使って分割し、最終的にセクシュアリティを越えた身近な他者による共助のモデルの片鱗を提示し、現在の限界を示した。

4. 研究成果

本研究の分析からは、LGBTX というセクシュアリティを基軸にしながら、個々人のかかわりの中で人生や生活の質（QOL）を高める多様な人間関係を築き始めているということが見いだせた。LGBTX への何らかの差別が却って多様で緩やかな人々の繋がりを形成させている。LGBTX が半ば周縁化されていることで、パートナーとの家族形成が異性愛者と比較して困難であるから、おひとり様になりやすいという現象も生み出すが、職場から切り離された互助の領域―身近な他者との助け合いの領域―を切り拓いている。しかも、LGBTX の飲食店等が、LGBTX 以外の人たちにも限定的―特に、おひとり様の女性や何か家庭生活に困難を抱える人―であれ、開きつつあり、人々はセクシュアリティの差異を認めつつも、その差異を越えた互助関係をこうした場所で取り結べつつある。

LGBTX の人々にとってセクシュアリティが人間関係の基軸になっているということは明らかであるが、このことは LGBTX に限ったことではあるまい。むしろ、異性愛者ですらその人間関係はすべてにわたりセクシュアリティが基軸になっているのである。異性愛者は、LGBTX 人々の数に比べれば極めて多いから、異性愛というセクシュアリティが無意識化、不可視化されているだけである。これまでは男性ヘテロセクシュアリティが人々の紐帯の基軸であったが、身近な他者による互助の実現のためにはそれに替わる、人々を接続するための別の手段が必要であろう。つまり、セクシュアリティに＋アルファが必要である。例えば、スポーツやボランティアでもそのようなものとなりうるし、こうした活動が若いうちから行われていないと高齢期の多様な互助に直結していかない。こうした活動を通じて互助関係を作っている―将来を展望して作ろうとしている―LGBTX がいたのは、本研究が示したとおりである。例えば、LGBTX の人々の中には、セクシュアリティを越えて挙児活動や介護活動等をしている人たちがいるが、こうした地道な互助活動が、現在からは想像しえないような多様性―セクシュアリティや障がい等を越えた―を受け入れる複数の多様な社会的枠組みを将来、実現してくれる可能性は十分にあるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 水野礼	４．巻 30(1)
２．論文標題 性機能不全における治療の安全性を考える ；境界例／普通精神病という観点から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 生命倫理	６．最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水野礼、入澤仁美	４．巻 9
２．論文標題 カウンセリング不在の生殖医療にみられる倫理的問題点	５．発行年 2021年
３．雑誌名 臨床倫理	６．最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲垣惠一	４．巻 16
２．論文標題 性の多様性の解放論的権利論の視座から老成学的視座への転換	５．発行年 2019年
３．雑誌名 哲学フォーラム	６．最初と最後の頁 1,10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 稲垣惠一
２．発表標題 同性愛者と子ども―レズビアンとゲイの調査及びその声―
３．学会等名 釧路生命倫理フォーラム
４．発表年 2020年

１．発表者名 稲垣惠一
２．発表標題 日本のゲイが子どもを持つことは困難か？－アメリカ・ゲイビーブームと日本のゲイの声－
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 稲垣惠一
２．発表標題 性の多様な家族における共助の老成学的考察
３．学会等名 日本生命倫理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 水野礼
２．発表標題 「倒錯」という観点から血縁主義と搾取の関係を考える
３．学会等名 釧路生命倫理フォーラム
４．発表年 2020年

１．発表者名 水野礼
２．発表標題 女性性機能不全に対する支援援について考える－青年期心性／境界例心性の延長、ないしは社会的不妊という観点から－
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 水野礼
２．発表標題 「境界例」概念からとらえる女性性機能不全「治したい」のは誰か？
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 水野礼
２．発表標題 ファンタスマゴリーとしての生殖補助―「倒錯」概念から血縁主義に基づく搾取について考える―
３．学会等名 日本生命倫理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 稲垣惠一
２．発表標題 LGBTXと子ども―老成学的視点に基づく調査からの一断片―
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 稲垣惠一
２．発表標題 日本のLGBTXと家族、子ども―ゲイビーブームとの比較―
３．学会等名 釧路生命倫理フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 稲垣惠一
２．発表標題 LGBTXと家族、子ども―アメリカ・ゲイビーブームとの緩やかな比較―
３．学会等名 日本生命倫理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 水野礼
２．発表標題 女性性機能不全群の治療をめぐる制度にみられる問題点ー「境界例」現代ラカン派における〈普通精神病〉という観点からー
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 水野礼
２．発表標題 性機能不全における「治療」を考えるー制度・主体・イデオロギー
３．学会等名 釧路生命倫理フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 水野礼
２．発表標題 女性性機能不全の「治療」をめぐる問題―彼女らの「自らの人生の担い手性」はどこへ向かわされるのか―
３．学会等名 日本生命倫理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 森下直貴
２．発表標題 高齢者の〈老い方＝生き方モデル〉、方法論的枠組みおよび仮説
３．学会等名 日本生命倫理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 稲垣惠一
２．発表標題 性の多様性の解放論的権利論の問題
３．学会等名 アレント研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 森下直貴	４．発行年 2020年
２．出版社 幻冬舎	５．総ページ数 265
３．書名 システム倫理学的思考―対立しながらも、つながり合う―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森下　直貴 (MORISHITA Naoki) (70200409)	浜松医科大学・医学部・名誉教授 (13802)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	村瀬　智子 (MURASE Tomoko) (80210037)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授 (33941)	
研究分担者	城田　純平 (SHIROTA Junpei) (00816598)	人間環境大学・人間環境学部・助教 (33936)	
研究分担者	水野　礼 (MIZUNO Rei) (80866898)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・研究員 (23903)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関